

夜半亭門下の月並句合

* 永 井 一 彰

夜半亭蕪村・几董には天明期に月並句合の催しがあったことは拙稿「夜半亭月並句合(一)」(『滋賀大國文』十八号)「同(一)」(『奈良大学紀要』九号)に述べたが、少し遅れて寛政期になると、几董の門生でありやがてはその別号春夜楼を相次いで継承することになる紫暁・呂蛤の二人にも同様の句合の催しがある。この稿では、管見に入った紫暁・呂蛤各撰になる月並句合の摺り物のあらましを紹介し、蕪村・几董と続いた夜半亭月並句合が紫暁・呂蛤へと流れて行くことによつてどのような変質を遂げて行ったかを考えてみることにする。

一、紫暁撰月並句合

(一) 寛政五年までの紫暁

紫暁撰になる月並句合の摺り物は寛政五・六年の約二年分が現存する。が、それについて触れる前に、寛政五年までの紫暁の事蹟について、特に几董との関わりを中心に述べておくことにする。

紫暁が明確に几董門生として登場するのは天明七年の几董「初懐帛」及び同年発刊の紫暁「曙双帛」を俟たねばならないが、両者の交流は安永五年まで溯ると思われる。紫暁は前号を車虻と称し、伏水の鷺喬門であった。それは、安永五年の鷺喬歳旦帳「曙草紙」(東大酒

竹文庫蔵、題簽なく表紙に「曙草紙」と墨書き)に車虻の発句が計九章入集し鷺喬らと巻いた歌仙も収録されていること、また安永六年の鷺喬歳旦帳「丁酉載」(天理図書館綿屋文庫蔵、後補題簽に「丁酉載」と墨書き)にも「車虻更紫暁」として発句一章と紫暁発句鷺喬脇句による同門との半歌仙が収められていることによつて知られるのであるが、この二書には蕪村・几董の発句もそれぞれに各二章入集する。ひるがえつて几董著書を閲するに、安永五年「初懐帛」には伏水の鷺喬・賀瑞の句が各一章、また同秋編の「統明鳥」には伏水として鷺喬四句、雨谷・山肆各三句、賀瑞・車虻・御風・斗唸各二句、柳女・呉卿・李収各一句と計十名二十一句の入集を見る。うち柳女を除く九名は、前記鷺喬の両歳旦帳に出る作者である。明和九年の几董編「其雪影」に伏水の作者として出るのは賀瑞・柳女・霞吹の三名だけであったことを思えば著しい進出ぶりである。おそらくは、賀瑞あたりを媒介として几董と鷺喬に交流が生まれ、その縁で几董の著書に車虻の句も記されることになったと思われる。几董と紫暁に当時直接の面識があったかどうかは定かでないまでも、二人の交流がこの頃から始まったと推測することにさして無理はなからう。因みに記せば、几董句稿「丙申之句帖卷五」三十四丁裏から三十五丁表にかけてのちょううど丙申

(安永五年)の終の部分に「初懐帑加入之扣^かへ」として数章を書き留め、その中に驚齋句が二章見える。今は伝わらない安永六年几董初懐帑にも、驚齋をはじめ伏水作者の句が収録されたものと推察される。

なお、車虻を名乗っていた安永期の紫暁についてここで是非とも触れておかねばならないことがある。それは、車虻がこの頃京点者による月並句合に同門ともども参加していたということである。天理図書館綿屋文庫に「誹諧しをり萩」と題する一冊がある。半紙本大で、原裴薄茶色表紙、原題簽が中央にあり白地双辺で「誹諧しをり萩全」と墨摺り。本文は全百十四丁。板元は京の菊屋安兵衛である。年記がないために化政期に分類されているが、この書は明和九年七月から安永四年十二月まで約三年六ヶ月分の蝶々菴百花撰になる月並句合の月刊摺り物を、新たに通して丁付を入れ再編発行したものである。蝶々菴百花は「誹諧家譜」「同拾遺集」「同後拾遺」によれば、隠岐米史門、祇園町壇之下に住み安永八年二月廿五日六十五才にて没。この書の出版年は定かではないが、終丁に雪見月の頃編を終えた旨の記事が見られるので、安永五、七年の間であろう。このことは天明二年同書肆刊の「誹諧都枝折」巻末広告に、「移竹発句集」(安永六年刊)「鬼貫獨吟百韻」(安永八年刊)などと並んで「誹諧菜萩蝶々菴百花選」と見えることから裏付けされるところである。さて、「誹諧しをり萩」としてまとめられたこの百花撰句合の作者團は、京を中心として嵯峨・伏水・宇治・丹州・江州・伊勢・摂州・能州の各地域に及ぶが、中に伏水の作者として車虻の名が見える。車虻は安永三年七・九・十一月と四年一・四・五月に各一句、二月に二句、七月に三句入選して、うち四年五月入選句は巻頭の位を占めている。また、伏水の肩書を持つ作者は車虻の他に十四名出るが、そのうち和候・来志・可正・朝起・巴水の五名は安永五年驚齋歳旦「曙草紙」に名が見えた

作者で、更に上記三名は「丁酉載」にも出る。これによって、車虻が既に安永期に同門と共に京点者による月並句合に参加していたことが知られる。ちなみに、この句合安永四年七月には「フシミ来志連」という名書きがあり、伏水連中の投句取りまとめ役は来志であったかと思われる。なお、右に関連してここに一つ考え併すべきことがある。それは拙稿「夜半亭月並句合(-)」で触れた如く、安永四年頃に蕪村が伏水社中を対象に月並句合の判をしていた形跡があるということである。それは安永四年執筆と考えられる伏水山肆宛の二通の蕪村書簡からの推測であったが、蕪村の言う「御社中」にはあるいは車虻も含まれていたのかも知れない。しかし、これまた推測の域を出ず、それを傍証する資料は何もない。が、何れにせよ、車虻が既に安永年間、京点者の月並句合に同門ともども参加していたという事実は、後に几董判句合を継承して判者となる紫暁の前歴として注意しておくべきことであると思われる。

さて、安永六年「丁酉載」において改号した紫暁のその後であるが、天明七年までの約十年間については詳しくわからない。ただ、執筆年代未詳三月二十一日付藤屋宛蕪村書簡に、

花見すりもの今は板下いたし彫工へわたり可申候。(略)木屋町紫暁へ万事托置候。出来上御うけ取(可)被下候。

とその名が見え、蕪村没後も天明六年刊几董編「統一夜松後集」に発句二章入集し、同年の夜半亭判月並句合閏十月に洛の肩書で一句入選していることなど、几董の周辺に見え隠れしているのを概かに確認できるのみである。しかし、天明七年になると几董「初懐帑」に紫暁の名が初めて登場し、同時に紫暁は自らの歳旦帳「曙双帑」を発刊して、夜半亭門生であることを宣言すると共に宗匠として一家を構えるに至ったと思われる。同年霜月刊「さくくの宿」収録の九月几董市中転居新

菫句会の歌仙・十月祖翁忌追善百韻に紫暁の名が見え、発句二章が入集するのもその交流の深まりを示すものである。また『晋明集四稿』天明七年冬の項に「贈紫暁梧右辞」と題する几董句文及び「聴亀菫会」の記録が書き留められていることも、紫暁の俳諧に対する情熱が高まって来たことと無関係ではなからう。以後寛政五年までの紫暁は、几董追善集編纂を中心に極めて活発な俳諧活動をしている。

天明八年几董「遊子行」に発句入集

「松のそなた」(紫暁 播磨行記念集) 刊

寛政元年几董「初懐帯」に発句他入集

「寛政己酉句録」に紫暁の名頻出——冬、几董没——

寛政二年「よしの記行」(几董遺稿) 刊

「鐘筑波」(几董小祥忌追善集) 刊

寛政三年「春帖」刊(未見)

「この時雨」(几董三回忌追善集) 刊

寛政四年「まだら日記」(紫暁城崎行記念集) 刊

寛政五年「あけぼの草帯」刊

「も、ちどり」(芭蕉百回忌追善集) 刊

天明七年に歳旦帳を発刊し宗匠として一家を構えたと思われる紫暁であるが、その点業を伝える資料は寛政三・四年になってようやく目につくようになる。先ず寛政三年刊「この時雨」には「聴亀菫選四季句合抜萃三十五吟」として、四季発句三十五章を挙げている。これは内容から見て、四季自由題による一時的な句合であったと思われる。作者を地域別に示すと、京・杜栗・英雀・呂蛤・佛狸・蘭翅・車容、山科・雀邸、城南林・麦子、浪華・霞外・芝風・擣室・鳳卿・仙輿・甘三、江日塾・芦牛・湛水、江菟・成應、高砂・右契・李冠、撰灘・二奈・青牛・千圭、播磨・湛露・東圃、伊丹・東瓦、廣寫・可友とな

り計二十六名、雀邸の三句入選を最多とする。作者圏は広いが、作者数・選句数から考えて小規模の催しであったと推察される。同様の句合の記録は寛政四年「まだら日記」にも見られる。「聴亀菫選四季句合抜萃十七章」とあるのがそれで、作者は京・里春・春坡・車容、山科・雀邸・加折、在京・麦子、城南下方、江日塾・素角・芦牛、浪花・甘三、ハリマ・東圃、伊丹・東瓦、高砂・右契・菊躬(李冠)、撰灘・青牛の計十五名であるが、うち十名は「この時雨」収録の句合に出ている作者である。これも作者圏は広いが、前回よりも更に小規模の句合であろう。なお、「まだら日記」にはこれ以外にも紫暁に点業があったことをうかがわせる記事がある。その一は「石菫をしこけハきいと句ふかな、車容」の句にある「聴亀判角力合に」という前書である。この車容句は寛政八年刊「うき草日記」にもやや句形を異にして出ており、それには「聴亀庵即評角力合に」という前書を付す。その二は、対馬社中の句に紫暁が判をした記録で、「朝鮮呼崎堂の若和布を贈りて聴宗匠の安否を伺ふ序社友の稿を登せて選を願ふ」と前書し、対馬・賀瑞・白眠・洛水・眠鷲の句各一章を挙げる。以上、「この時雨」「まだら日記」両書に見える紫暁判句合の詳細は定かではないが、紫暁が寛政三・四年に点業を行っていたことは確認され、寛政五・六年に月並句合が生まれる背景はあったと言うことができよう。

(一) 寛政五・六年紫暁撰月並句合

天理図書館綿屋文庫蔵『月並句合』(わ・一七三・三七)は、寛政五年紫暁撰月並句合の摺り物を綴じ合わせたものである。「月並句合」は半紙本一冊、縦二三・〇、横一六・二、表紙は後補茶色で題簽はない。全十三丁であるが、第一紙は所持者竹葉亭白水の白句書き込みで、残り十二丁が紫暁撰句合の摺り物である。この摺り物は半丁

十行の若草色罫紙を使用し、罫紙匡郭は縦一七・五、横二七・四。板芯は



とあって、下部〇欄に丁付を入れる。この罫紙は兒童が天明六・七年句合に使用したものと全く同型であるが、匡郭はそれよりも一回り小さい。また、全十二丁とも罫線の欠落箇所が一致するので、同一板木により量産された罫紙と思われる。

寛政六年度分は、柿衛文庫蔵『月並抜句集』に合綴されている。これも半紙本大の一冊で、縦二二・七、横一六・三。表紙は後補で、上部に青色下部に茶色の曇りのある用紙を使い、題簽はなく左肩に「月並抜句集」と墨書きする。全四十七丁のうち、前半二十二丁は寛政六年春鷗舎来之評月並句合の摺り物、後半二十五丁が同年紫暁撰の月並句合摺り物である。紫暁の摺り物は天明五年に使用されたものと全く同型同色の罫紙で、匡郭は正確に計っていないが写真より推算するに五年度分と同寸法らしく、また罫線の欠落箇所も全丁五年のものに一致するので、同じ板木による用箋と思われる。

さて、以上の摺り物の内容であるが、寛政五・六年とも正月分巻頭三行に

平安聴亀莽撰

月並句合抜萃

寛政五癸丑正月

惣句二百七十章之内

題 七種 柳 凍解 御忌 猫恋

平安聴亀莽撰

月並句合抜萃

寛政六甲寅正月

惣句四百二十章之内

題 實引 松の華 春の雪 白負 東風

と、撰者名・年月記・惣句・季題五を挙げ、以下高点句から順に「右

十七印」「左十五印」の如く点印別に数句づつ入選句を並記し巻末に及ぶ。二月以降は巻頭に月数・惣句・季題五を挙げ、以下同じように点印別に入選句を並記する。この形式は寛政五・六年を通じて変わることはない。また、寛政五年二・三・四月及び六年のすべての月には巻末の欄外もしくは欄内に「三十四、吟露 二十九、至幸 廿七、南昌 以下畧」（五年二月）というように、総合得点で上位を占めた作者名が第一位から二位あるいは三位まで記載される。寛政五年三月の摺り物を左に例示する。

三月々並抜萃	惣句二百七拾五章之内
題 汐干 葦 わか鮎 藤 壬生ねふつ	摘事もゆるし色なり華重 深神柏葉
兒をかりてミふの念佛にもふて鳥	仲亭
右十五印	セリ川吟露
駕を出てはたし遊びの汐干哉	
▲	
小嶋よりまねく扇や汐干瀉	南昌
右十印	
三十七点仲亭 三十五、南昌 三十四、寄燕	柏葉

次に、寛政五・六年紫暁撰月並句合のすべてについて、月数・丁付・点印別入選句数・各月入選句合計・惣句数・総合得点集計の有無・その他留意事項を一覧表にしてみる。表 I を参照されたい。

以下表 I により、先行の几童判句合と比較しつつ紫暁撰句合の概略を把握してみよう。先ず、寛政五・六年紫暁撰句合の摺り物が完備しているかどうかを確認しておく。表 I から明らかのように、五・六年を通じて最も例が多く基本的と思われる紫暁摺り物の形式は「月数・惣句・入選句点印別並記・総合得点集計」というものである。寛政六年分はすべてこの形式を満たし丁付も抜けている所はないので、完備していると考えて間違いない。同じ観点から五年二・四月にも落丁はないと思われる。また五年六・八・十二月には総合得点集計が見られないが、十一・十二月のように巻末に空白を残したままの例もあることから判断すれば集計をしない月もあつたわけで、六・八・十二月にもやはり落丁はないと考えられる。そこで問題になるのは五年一・五・七月であるが、これらの月の巻末数字には点印が見られない。摺り物に掲載した入選句に点印がないのは五・六年を通じて他に例がなく、おそらく五年一・五・七月には各一丁の落丁があると思われる。それは一月と二月の間に丁付^①が抜けていることから察せられよう。五年一・五・七月の入選句合計にプラス α としたのはこの理由による。なお、丁付についてであるが、五年度分は八月に^②九月に^③と些かの混乱があり六・七・十・十二月は空白のまま不統一の謗りを免がれないが、五年前半分及び六年度分から察するに通りの丁付とするつもりだったのであろう。かように月並句合の摺り物に通しで丁付を入れるのは既に几童に見られたところで、紫暁は先師の例にそのまま倣ったものと考えられる。

さて、表 I から最初に気付くのは、この一連の摺り物が一〜三丁当

表 I

	月数	丁付	<点印別入選句数>								入選句	惣句	総合点集計	その他		
			十 八	十 七	十 六	十 五	十 四	十 三	十 二	十 一					十 九	十 八
△寛政五年▽	1	①									4	14+ α	270	あり	卷末4句点印なし ^④ オ 3行目空白 卷末6句点印なし 卷末7句点印なし 卷末5行空白 同上	
	2	②										16	350			あり
	3	③										16	275	あり		
	4	④										16	210	あり		
	5	⑤										6	16+ α	285		
	6	⑥											16	205		
	7	⑦											7	17+ α		255
	8	⑧												16		240
	9	⑨												16		255
	10	⑩												16		310
	11	⑪												10		175
	12	⑫												9		160
△寛政六年▽	1	⑬											30	420	あり	
	2	⑭											33	645	あり	
	3	⑮											16	525	あり	
	4	⑯											16	375	あり	
	5	⑰											17	495	あり	
	6	⑱											35	645	あり	
	7	⑲											32	625	あり	
	8	⑳											33	650	あり	
	9	㉑											25	540	あり	
	10	㉒											33	760	あり	
	11	㉓											33	815	あり	
	12	㉔											50	890	あり	
	閏12	㉕										55	910	あり		

ての極めて整然たる月割りとなつてゐることである。これは、紫暁撰句合の摺り物が月毎にきちんと印行されてゐたことを意味する。そのことは、五年五・十・十一月及び六年一・七・九・十二月分にそれぞれ一行から五行の空白があることから傍証される。同じような現象は几童判句合の摺り物にも見られたが、これは摺り物が月刊であるが故の現象である。また、五・六年兩年分の摺り物の筆蹟は私見によれば、五年一・五月・六・十二月（紫暁筆か）・六年正月・十二月と三度交替しているが、同一筆者の手になる範圍に於ても各月の字の大きさ及び摺りの墨色にはらつきが見られる。このような不統一も摺り物が月刊であつたことを示す一証左とならう。先行の几童判句合にあつても入選句披露の摺り物は月刊を原則としていたが、間々二・三ヶ月にまたがる一括披露も見受けられた。それに比較すれば、紫暁は実に几帳面に月刊を遵守したと言える。が、これは紫暁の性格に帰せらるべき問題ではなく、次に述べる紫暁撰句合の点数を前面に出しての入選句披露形式と関係のあることがらだと思われ。

紫暁撰句合の摺り物は先に述べたように点印別に入選句を並記するのを例とする。使用されている点印は十八印から八印まであり（但し、九印は見当たらす）、入選句の多くは十五・十二・十印に集中している。また巻頭の句も五年一月のように一句だけというのはむしろ例外で、数句を並べ一括して最高点とするのが普通である。極端な場合は、六年五月のように入選句十七章すべて十印とする例さえ見られる。さて、このような紫暁句合における点数を前面に出しての入選句披露は、先行の几童判句合とはやや趣を異にする。几童判句合に於ても「右七句十點・右十一句九點」（天明六年六月）「十印十三章」（天明七年一月）というように、数句を並記して点印を付す例は間々見受けられた。しかし、それは惣句数（寄句数）の多い月に限られていて、基本

的には点数を示さず

陽炎に花焦したる椿かな 池田東籬

きのふの雨にうつろへる花の日にあひて葩漸爛れたるを陽炎に照し
合せて花焦したるといふ作意新意にして粉骨あり一巻の秀逸たるへ
し

（天明七年一月）

というように、綿密にしてかつ懇切丁寧なる句評を付し、高点順に句を並べるのを基本形式としていた。それに総合得点集計は几童判句合には見られない。つまり、几童判句合には、判者・投句者にそれぞれ作句指導・修練という性格が色濃く見られたのであるが、紫暁撰句合に至つては既にそのような意識は失なわれ、句合の興味はもはら点取りに移つて來ていたのである。そういった興味に支えられた句合であればこそ、入選句披露の摺り物もいきおい月刊であることが要求されたものと思われ。

次に惣句数（寄句数）と入選率について見る。寛政五年紫暁撰句合の惣句数年間合計は二九九〇章で月平均約二四九章、六年は年間八九五章で月平均約六三三章となり前年より倍以上増えているが、兩年を通じての月平均は約四五一章に留まる。それに較べ、天明四年一月から七年五月までの几童判月並句合（天明五年一月から六年四月までの別立ての句合も含む）に於て、惣句数の記載のある月は天明四年四・五・八・十月・六年一・十一月（合閏十月）・七年一・五月・別立ての句合六年二・四月の計二十五ヶ月で、この惣句数合計は一八三三〇章で月平均約七三三章である。几童判句合では惣句数が記されない月も多いので、断定はできないが、概ね紫暁撰句合よりも月平均の惣句数は多かったと思われる。なお、『月並抜句集』前半部に合綴される寛政六年來之評の月並句合では、年間に一三九〇五章月平均約一〇七〇章を集めている。先師几童あるいは同時期の來之以上に句を集め

つ。しかしながら、紫暁は几董の遺産に全面的によりかかっていたというわけではない。表Ⅰの△印は、その作者が天明七年『曙双紙』から寛政五年『もゝちどり』までの紫暁著書に一度は顔を見せる作者である。○印と重なる作者も多いが、京の孤秀・橋仙・伏水の錦圃・山科の雀村・加折・池田の阿柳・左言・魯坊らは、几董判句合とはおそらく関わりがなかった作者達である。寛政五年句合は几董判句合の経験者に支えられながら、紫暁とゆかりのある作者をそこに加えて成立していると言ふことができよう。なお、各地域で多数入選を果たしている作者、京の南昌・遅日・伏水の買山・山科の雀村・浪花の一透・池田の左言はとりわけ紫暁著書との関わりが深い。各地域の世話人はこれらの人々であったのだろう。特に、京の遅日（春坡）伏水の買山は几董判句合に毎年参加しているのみならず、それに先行する蕪村判句合から夜半亭月並句合に関わって来た経歴を持ち、世話人としては実に適格であったと思われる。

寛政六年度は、惣句数の増加と並行して入選作者数も年間で百十名と増えて来ている。うちわけを記せば、京は南昌42・遅日39を頭に五十三名、伏水は買山26以下十七名、山科は雀村3以下五名、浪花は一透10以下十七名、池田は紫電3・如山3以下五名、敏馬浦は月丘1以下四名、他に嵯峨・深草・洛東・栗津・神足・丹州龜山・東都・西宮・灘大石各一名である。主たる作者圏に大きな移動はないが、五年には見られなかった地名が幾つか加わりいくらかの広がりを見せている。几董判句合経験者に紫暁ゆかりの作者を加えての大勢に変わりはない。また、各主要地域の世話人と思われる作者は、池田を除き、寛政五年と同じように多数入選を果たしている。この年の句合で、他に目につくのは春坡一族の進出である。前年の句合では遅日以外の名は見えなかったが、この年は遅日39をはじめとして春峰16（春坡息）・春花

10（春坡息）・一冠3（春坡甥）・万佐女2（春坡妻）と、その一族の入選句は計七〇章に及ぶ。これは全体の入選句数の17%を越えている。几董没後、春坡は紫暁ととりわけ親密な間柄であったことは下村をさむ氏の著書『春坡の資料と研究』に詳しいが、これもその親密さの反映であろうか。

以上、先行の几董判句合と比較しつつ寛政五・六年紫暁撰月並句合の概略を述べて来たが、その後紫暁の月並句合はどうなったのであるか。紫暁は寛政六年以降も蕪村・几董の追善集編纂を中心に積極的に行ない、享和元年には二世春夜楼を名乗ることになるが、それから数年のうちに世を去ったと伝えられる。その間の紫暁著書に關する限り

今ハ昔無翁の句合に高判たりし野作を思ひ出てこたひの手向にもか
なと消息に申し贈る

片町の煙野行野分哉

菅鳥

此二章ハ七師が選に高判或ハ上座の句也前に倣ひて爰に拾ふ

魚市の後に高し冬木立

棋灘士巧

むさ／＼と牛牽入る、清水哉

土喬

（寛政七年刊『雪の光』）

といった蕪村句合に対する追懐が目につくのみで、紫暁撰月並句合に關する記事は管見に入らない。

二 呂蛤撰月並句合

呂蛤は「生涯足の癩ひ」（『鴈風呂』序）があったためか、紫暁ほど盛んに俳諧活動をしておらず、几董との関係もそれほど詳しくはわからない。が、天明六年几董「初懐帑」及び「統一夜松後集」に初めてその名が見え、同年几董判月並句合に参加して二・三・十・閏十月

に各一章と別立ての句合一・二月に各二章（一月は巻頭と二位を占める）の入選を果たしており、このころから何らかの交流が始まったと思われる。翌七年にはやはり几童「初懐紙」に入集し、句合では五月に入選して巻頭の位を得ている。天明八年「遊子行」には発句一章が入集する。また几童没年の寛政元年にも「初懐帋」に名が見え、「寛政己酉句録」にその名が散見する。それ以降の呂蛤は、寛政三年に歳旦帳「はつすゞり」を発刊した後、四年に「初すゞり」六年に「鷹風呂」七年には几童七回忌追善「金剛心」の著が残る。かように、紫暁に較べれば極めて纒かな足跡しか残さない呂蛤であるが、彼もまた一家を構え点業をしていたことは、寛政九年刊「俳諧家譜後拾遺」の「平安点業者流家系」の項に黒瀬去舟―黛山の俳系として「呂蛤西村氏号スニ山鳥房ト住居新町丸太町下ル丁」と出ることから明らかである。では、呂蛤が一家を構えたのは何時のことであろうか。「鷹風呂」の重厚序文（寛政六晩夏書）に「京師一人の詞宗」とあるから、これ以前であることは確かである。また、「俳諧家譜後拾遺」の草稿本とも言うべき「再々篇俳諧点業家譜」（天理図書館編屋文庫蔵）では「天明丁未歳當時在京点者流家系」の項に呂蛤の名が見え、更に同書巻末の「當時現存詞宗家發句短冊到來不混於列席次第」に出る呂蛤肩書には寛政戊五月に「届」をした旨の書き込みが見られる。この書き込みが勝峯晋風氏の言われるように「所司代から点業を允許され」た意味の注記（俳書大系「近世俳諧名家集」「鷹風呂」解題）だとすれば、正式に宗匠として認められたのは寛政二戌年のことである。呂蛤が歳旦帳「はつすゞり」を発刊したのが寛政三年であるから、寛政二年立机と見れば辻褄は合う。なお、呂蛤の俳系について「再々篇俳諧点業家譜」「俳諧家譜後拾遺」とも去舟―黛山の俳系とするが、実質的には夜半亭系と見るべきことは夙に大磯義雄氏の指摘（「夜半亭・

春夜楼の継承と末路」愛知学芸大学報告第十一輯）がある。

呂蛤の選になる月並句合の摺り物は紫暁のようにまとまっては残らず、桜井武次郎氏蔵「四季月並句集几童門人呂蛤撰／寛政板」と題する一冊に綴じ合わされた十数丁が管見に入ったのみである。該当書は半紙本大、薄緑色後補表紙で、白地題簽を左肩に貼り右の如く墨書きする。なかみは全六十二丁で、大椿子・呂蛤・伴松庵幾風・幕天齋一鳳・冠芳齋・麦里房・稻泉・凶南ら各判の月並句合摺り物を綴じ合わせたものである。うち、呂蛤選のものに「己歳」また麦里房判のものに「巳三月」「巳四月」という記載が見られるので、寛政九丁巳年前後のものを合綴してあると思われる。この書の巻頭十三丁が呂蛤選月並句合の摺り物である。以下、それについて述べる。

合計十三丁の呂蛤選句合摺り物は約二年分二種類に大別できる。先ず前半六丁は紫暁が寛政五・六年句合に使用した若草色野紙と全く同型のものを用い、うち五丁は匡郭の寸法もそれにほぼ一致する。紫暁のものと同木板による用箋とは言えないまでも酷似していることは確かである。残り一丁も同色同型であるが、縦が〇・五程程短かい。以上の六丁は何れにも丁付が無いので、仮に一六丁とする。第一丁から五丁までは巻頭の一行に「題正月（五月）之部」と記し、以下二行目から裏終行まで入選句を並べる。但し、一月分巻末には「追加」として「判者大椿子」の句を三章掲げる。これによってこのひとまとまりの摺り物が大椿の判になることが知られるのであるが、呂蛤にその別号があったことは「金剛心」に収録される孤秀発句呂蛤脇句による几童追善兩吟歌仙前書に「一夜予か錦江亭に大椿子をとめていさゝか師恩を報すへき一巻をなしぬ」とあることから明らかである。入選句数は一月が十五、二ヶ月は各十九章である。何れの月も季題を挙げないが、句より判断するに特に季題は定められていなかったよ

うである。第六丁は一行目に月数を記さず季題五を挙げ、以下十九章の入選句を並記する。この丁は季題から見て四月分である。第四丁にも四月之部があり、用箋・形式も些か異なるので別年のものとも思われるが、取り敢えず一括して考える。なお、何れの月にも点印・総合得点集計は見られない。この六丁に出る作者は計三十三名、浪花の二名を除き他はすべて京の作者である。また、几董判句合に名の見えた作者は暮天(一鳳であろう)・化山・浪花一透の三人だけで、紫暁撰句合のような深い関わりは認められない。三十三名のうち十四名は寛政三年『はつすゞり』以下の呂蛤著書に出る作者であるから、概ねは門下及びゆかりの作者対象の小規模な句合であったと思われる。以上六丁の摺り物の年代は不明である。しかし、寛政五・六年紫暁撰句合と酷似した用箋を使っていること、それに三十三名のうち七名が兩年の紫暁句合にも出る作者であることから考えると、この六丁も同時期のものではないかと推測される。

さて、後半七丁は趣を一新して縦約一七・〇・二の墨色匡郭のある用箋を使う。(但し、終丁のみ匡郭が一回り小さい)。板芯は



とあって、下部に一七と丁付を、また第一・七丁上部〇欄にそれぞれ春・夏と入れる。第一丁巻頭一行目に「己歳月並大菊菴呂蛤選」二行目に季題五を挙げて以下入選句を並記し、巻末欄外には「天鈍来地一花 人白酉」と総合得点で上位を占めた三名を記す。巳年は先に述べた如く寛政九年であろう。二月以降も月数は記さず、季題五を挙げて入選句を並記し巻末に総合点上位者三名を記す。丁付一・二が一月で入選句四十六章、三・四が二月で四十七章、五・六が三月で四十

七章、七が四月で二十三章という内容であるが、二月にのみ「惣計六百余吟」と寄句総数を記す。作者総数は七十四名、うち岡崎の一名を除き、他はすべて京の作者である。几董判句合に出た作者は暮天・化山の二人だけで、呂蛤著書に出る作者が十四名と多く見えることは前述の分と同じであるが、この年になると寛政五・六年紫暁撰句合の作者との重なりも四名と少なくなって来ている。以上、断片的に現存する摺り物によって見る限り、寛政期の呂蛤選月並句合は几董判句合との関わりはさほど深くはなく、用箋の酷似・紫暁撰句合の作者との重なり・年代それに前述した紫暁の句合(『この時雨』収録の四季句合及び寛政五年月並句合)に呂蛤は作者として句を寄せていたことなどを総合すると、むしろ紫暁の影響下に成立しているような印象を受けられる。なお、点者としての呂蛤の名は『京羽二重大全』(文化七年序)にも出ており文化年間に入っても点業を続けたらしいが、その詳細を伝える資料はやはり管見に入らない。

〔注〕 執筆後、天理図書館綿屋文庫蔵「和哥葉集」(嵐桂舎沙村写、半紙本十一冊。わ・二〇三・七七)の第三冊目に、呂蛤こと春夜楼若夢が佳菊庵寛太と両評で庚午(文化七年)初冬に松尾樗谷大明神奉願句合の選をした記録があることに気付いた。詳しくは別の機会に譲る。

〔付記〕 この稿を成すに際し、岡田利兵衛先生には「月並抜句集」閲覧の御高配を賜わり、桜井武次郎氏は貴重な蔵書を快く御貸与下さった。また、下村をさむ氏著「春坡の資料と研究」からは多大の恩恵を被った。学恩に甚深の謝意を表する次第である。

(五十六年 八月記)

On “Tsukinami-Kuawase” of Yahantei-Buson

Kazuaki NAGAI

Summary

The present paper is on “Tsukinami-Kuawaase” (Monthly Haiku Gatherings), selected by Shigyo and Rokoh, disciples of Yahantei,